「消費社会の思想史」の可能性をめぐって

—キャンベル『ロマン主義の倫理と近代消費主義の精神』を手がかりに

池　田　成　一

はじめに

現代の思想的課題の一つの中心が「消費社会」の問題にあることは，現在広く認識されつつあるように思われる。例えば昨年，社会学者見田宗介氏は，常に原理的・思想的な考察を好む氏にふさわしく『現代社会の理論』と題した一般向けの新書を刊行したが，この本は，その副題である「情報化・消費化社会の現在と未来」が示すように，「情報化社会」とならんで「消費化社会」という概念で，現代社会の根本的特徴を捉えている[1]。

見田氏は，「現代の社会の理論は，この現代の情報化／消費化社会の，光の巨大と闇の巨大を，ともに見はるかすものでなければならない」(M ii) とする。即ち，現代の「情報化／消費化社会」の「光」の面とは，それがつくりだした欲望の「デカルト空間」＝「自由な空虚な無限性の形式としての空間」(M27) が固有の「楽しさ」「華やかさ」「魅力性」(M35) に満ち，「大半の人びとにとっては，少なくとも相対的に，またさまざまな条件つきでは，この情報化／消費化社会は，世界で最も魅力的なシステムである」(M122) ことである。しかしこの「光」の裏面にあるのは，この社会システムの「限界問題」としての環境問題・資源問題であり，また，「南の貧困」と「北の貧困」という，相互に意味を異にした「貧困」の拡大である。しかし見田氏

は，その「闇」にも関わらず，

> 「消費の社会」という思想とシステムに正しさの根拠があるのは，それが生産の自己目的化という狂気から人を自由にする限りにおいてであった。〈消費〉のコンセプトを徹底してゆけば，それはわれわれを，あらゆる種類の効用と手段主義的な思考の彼方にあるものに向かって解き放ってくれる。(M170)

と述べて，「情報化／消費化社会の（否定ではなく）転回」＝「この情報化／消費化社会の依拠する根拠，人間の欲望と感受の能力の可塑性と自由ということ自体を，根拠とし基軸として方向を転回すること，自然収奪的でなく，他者収奪的でないような仕方の生存の美学の方向に，欲望と感受の能力を転回すること」(M169以下）を現代社会の課題とするのである。

このような見田氏の論は，その結論がきわめて一般的な抽象論の段階をでないことも含めて，「消費化社会」の光と闇の中で，方向をはっきりとは見いだせない現代の状況を象徴しているだろう。我々も又，このような状況の中でともに模索せざるを得ない一人であり，見田氏以上に具体的な解決策を提起できるものではないが，思想史を研究する立場から何らかの思索の糧を提供できないであろうか。

この課題に対し，現代の思想史研究の状況は必ずしも十分ではない。見田氏のいう「効用と手段主義的な思考」の成立に関する思想史としては，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を代表とするマックス・ウェーバーの精緻な分析があり，これは現代において社会思想に関心を持つ者には常識となっている。しかし我々は，ウェーバーの分析と並ぶようなスケールの大きな分析を「『消費の社会』という思想とシステム」に関しては現在まだ所有していないのである。

その結果，「消費社会の思想史」の基準と呼べるようなものは未だ確立するに至っていないわけであるが，それに対する模索の試みとして注目すべきものは既にいくつか現れている。その中から，まだ翻訳されていないイギリ

スの社会学者コリン・キャンベル（1940年～　）の『ロマン主義の倫理と近代消費主義の精神』（1987年）の内容をやや詳しく紹介・検討することによって，「消費社会の思想史」が成立するための条件を探ることが本稿の最終目的である[2]。

まず最初に，キャンベルの本の目次を掲げておく。

第1章　イントロダクション

第1部　近代消費主義の精神

第2章　十八世紀イングランドにおける消費革命についての原因の説明

第3章　近代消費主義の謎

第4章　伝統的快楽主義と近代的快楽主義

第5章　近代の自律的想像的快楽主義

第2部　ロマン主義の倫理

第6章　もう一つのプロテスタンティズムの倫理

第7章　感情の倫理

第8章　貴族的倫理

第9章　ロマン主義の倫理

第10章　結論

一，「消費社会の思想史」の成立条件

ところで，最初に「消費社会」問題の現代における重要性を示すために見田氏の本を挙げたのには，それが最新のものでかつ広く読まれているだろうという以外に理由がある。見田氏は「消費化社会」の中に，それが抱える問題にも関わらず，一定の「正しさ」を見てとっているのだが，その理由は功利主義的な根拠からではなく，逆にその中に功利主義を否定する要素を見いだしたからであった。特に，「誘惑されてあることの恍惚と不安　システムの環としての幸福／幸福の環としてのシステム」（M33）と題された節では，

竹田青嗣氏の『陽水の快楽』に依拠しながら，

> （……）消費社会の，―「表面的」であれ何であれ，―固有の「楽しさ」「華やかさ」「魅力性」は，欲望が，「全く自由に」つくり出されるという形式だけによっては，かえって説明されることがない。そこには「魅力的」であることをめぐる熾烈な闘いがある。
>
> 必要を根拠とすることのできないものはより美しくなければならない。効用を根拠とすることのできないものはより魅力的でなければならない。
>
> （M35-6）

と言う。そして，この「魅力性」に誘惑される消費者の「幸福」は，それがたとえ「システムの環としての幸福」であったとしても，実感に基づく以上，単純に否定するわけにはいかないとするのである。

つまり見田氏においては，「消費社会」のもつ「魅力性」は，功利主義的効用とは対立的なものとして，また近代自由主義の「自由」にも還元できないものとして考えられているわけである。では我々は，それをどのようなものとして捉えることができるであろうか。見田氏は明確な名称を与えてはいないが，全体の雰囲気からそれは「ロマン主義」的なものといってかまわないだろう。あるいは，見田氏が依拠した竹田青嗣氏がつねづね復権を主張している「センチメンタリズム」といってもよい。

実は，キャンベルの課題はその表題が示すように，近代消費社会とロマン主義との関係を徹底的に追求することにある。キャンベルは著書の第1章において，このような問題関心の由来について語っている。彼は本来宗教社会学者であったが，六十年代におこった青年の「対抗文化」運動に触発された。また，この「対抗文化」運動と連動して，大学にも嵐が吹き荒れ大学関係者はそれに対する態度決定を迫られたわけだが，彼は，その中で賛否の態度決定から一歩身を退き，むしろこの「対抗文化」運動の本質を理解しようと志したという。そしてそれが本質的には「ロマン主義」的なものであることに

多くの人と同様に気づく（キャンベルには，ビートルズについての研究論文もある）。しかしそれは，キャンベルにとっては解答ではなく問題の第一歩にすぎなかった。なぜなら，「対抗文化」が「ロマン主義」の末裔であると認定することは，それまでの社会学において常識となっていた，近代を「合理化」の過程と理解するウェーバー以来の理論と矛盾したからである。「ロマン主義」という，「合理化」過程と矛盾する現象がこれほど強烈にしかも繰り返し起こってくる以上，「ロマン主義」を反近代的なものとみなすのではなく，「近代」を構成する本質的要素と見なさなければならないと彼には思われたからである。

そこで彼は，ウェーバーの議論を再検討した結果，ピューリタニズムが資本主義的生産を促進したとすれば，逆に反ピューリタニズムの立場にたつロマン主義が消費を促進したのではないかという仮説に至る。それは六十年代が同時に爆発的な消費ブームの時代でもあったからである。その時キャンベルは，マッケンドリック，ブリューアー，プラムの共著である『消費社会の誕生』(1982年)[3]にであい，「消費社会」がしばしば言われるような二十世紀の産物ではなく，既に十八世紀には誕生していたこと，産業革命と消費革命（consumer revolution）とは相伴った現象であり，ウェーバー的近代観はこのことを見落とした一面的なものであることを確信する。

このようなキャンベルの論点は，「近代を単に経済的合理性が貫徹され，より大きな欲求が充足されていく過程と見るのではなく，ブルジョアジーの消費主義的な視線と欲望が広範に組織されていく社会として捉え返していこうとする視線」「消費が単に近代の産業システムの補完物としてあるのではなく，むしろ資本主義を貫通する表象の文化戦略として持続的に発展してきたものであるとの認識」に立脚する八十年代の「消費社会の文化史的研究」[4]の動向に一致するものである。

ところでこの時キャンベルが参照したマッケンドリックたちの著作は，ファッション，ウェッジウッドの広告戦略，レジャーなどのトピックを扱うことによって，十八世紀イングランド社会において既に消費社会が成立していたことを論証しようとしたもので，現在，「消費社会」の歴史について論じ

ようとする場合には頻繁に言及される基準的著作であるが，しかしキャンベルは，マッケンドリックたちの理論的説明には納得しない。彼らの本を読めば，ファッション（流行），ロマンティック・ラブ，趣味（taste），小説を読むことの普及などの現象と十八世紀の消費革命には密接な関係があることが推察される。にも関わらず，その重要性が十分に分析されていないために，如何にして十八世紀に消費革命が起こったのかに関して，マッケンドリックたちの議論は不十分な説明しか与えていない（第2章）。キャンベルはその中に，現代の社会科学において消費者行動を理解するために用いられている標準的理論がもつ難点の反映を見て，さらにその欠陥を主題的に分析している（第3章）。

キャンベルによればマッケンドリックたちの議論は，

①人間には，一定の生活水準が確保された時には，生きるための必要を越えて自己実現や個性の表現を求める「本能」があるという「本能主義（instinctivism）」

②宣伝・広告による消費者の欲望の操作に重点をおく「操作主義（manipulationism）」

③ステイタス・シンボルを求める「競争（emulation）」から説明する「ヴェブレン風の見方（Veblenesque perspective）」

など，現在の「消費社会」を説明するさいにも頻繁に用いられる諸理論の組合せからなっている。しかし，十八世紀になぜ消費革命がおこったかを説明するにも，現代の消費行動を理解するにも，これらの理論だけでは十分ではないとキャンベルは主張する。その主要な論拠は次のようなものである。

①伝統的社会においては，生きるための必要を越えて富が蓄積されても，「本能」のように近代的消費に向かうことはない。

②「操作」が可能なためには，マッケンドリックが「西欧的流行パターン（Western European fashion pattern）」と名付けたものが既に成立していなければならないのであり，このパターンそれ自身は「操作」によって作り出すことはできない。

③ステイタス・シンボルを求める競争は歴史的に常にあったのであり，近代

の特殊現象ではない。また，「ヴェブレン効果」による説明は，「貴族社会の模倣による禁欲主義の放棄」によって，十七世紀の禁欲的ピューリタニズムから十八世紀の消費主義へと中産階級の態度が変化したとする歴史的説明に具体化されるのが普通であるが，実際に十八世紀に消費革命と結びついて成立したことが観察される現象，即ち，小説の流行やロマンティックラブ・イデオロギーなどは，貴族社会の模倣によってではなく，中産階級から起こってきたものではないか。

結局，「操作」や「ヴェブレン効果」は，「西欧的流行パターン」が成立した後にその一部として機能することはあるが，このパターンそれ自体を説明するには無理があり，そこには解かれるべき一つの「謎」があるというのである。

要するに，これらの理論の共通の難点は，近代社会の歴史的特殊性を十分に視野に入れていないということなのである。そこでキャンベルは，それまでその生産主義的一面性を批判してきたウェーバーの方法論は逆に評価し，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と同じ考え方を生産ではなく消費に適用したらどうなるかを思考実験してみようと提案する。ウェーバーが近代資本主義の歴史的特殊性を視野にいれ，それが成立するためにはプロテスタンティズムという「思想」の媒介が必要であったことを解明したことにならって，近代の消費態度が成立するためには，「ロマン主義」およびそれに先行する思想の発展（その中で特に重要視されるのは，十八世紀における「センチメンタリズム」であるが）が不可欠な媒介であったと考えるのである。『ロマン主義の倫理と近代消費主義の精神』というウェーバーをもじった題名は，ウェーバーの方法論を徹底的に模倣してみようとするキャンベルの思考実験の立場を端的にあらわすものである。

さて以上のキャンベルの視点から我々は，「消費社会の思想史」というものが重要性を帯びたものとして成り立つ条件について，最低限二つのことを取り出してみることができる。

第一に，近代的「消費」そのものの歴史的性格の明確な把握が必要である。

この把握を妨げてきたのは，よく言われるこれまでの社会科学の「生産中心主義」であり，「消費」が正面から取り扱うべき問題として立てられるためには，いったんこの「生産中心主義」を批判することが不可欠であった。

しかしここで急いで言っておかなければならないのは，これは「生産中心主義」とは逆の「消費中心主義」を唱えることとは別のことであろうということである。キャンベルがやっているように，生産と消費を近代社会における二つの契機と捉え，その二つの契機がそもそもの初めから近代を規定してきたと考え，その相互連関を探るべきなのである[5]。

第二に，「思想史」というものの位置づけと関わって重要なのは，歴史における「思想」の役割をどうとらえるかであろう。キャンベルの基本的発想は，単に「消費」の中にロマン主義的要素を見いだすにとどまるのではなく，

> （その前段階であるセンチメンタリズムをも含めた—池田）ロマン主義が，十八世紀後半から十九世紀初めのイギリスにおける近代的消費行動の出現を容易にし，実際に「消費倫理（consumer ethic）」を正当化する（legitimate）ことになった。（C 8）

とすることである。

> 心や精神が歴史の発展の背後にある最終的な力であるとする一面的な見解に賛成するわけではないが，諸観念の動きは，それが人々の『生きた信念』や『定式化された願望』として構成されたときには社会変動の主要な要因となるとする（ウェーバー的—池田）主張は，真面目にうけとられる。（C12）

この際，特に重要なのは，「思想」（特にその倫理的側面）が果たす人々の行動の「正当化」の役割である。一見したところ，単に人間の自然的「欲望」の発現のようにみえる現代の消費行動においても，それが成り立つためには倫理的正当化が不可欠であったと考えることは，「消費社会の思想史」に，

消費社会を人々がどのように捉えたかの歴史にとどまることのない重要性を賦与することになるのである。

ただし，キャンベルはその「正当化」が直接的な関係にあるとは考えない。ルターやカルヴァンの思想は，直接的には「資本主義」を「正当化」しようとしたわけではない。しかし結果的に，ルターやカルヴァンの意図を越えた力によって，資本主義成立の不可欠の一環を担うことになったのである。ここには歴史的にねじれた関係があり，その解明自体がウェーバーが自らに課した思想史的課題であった。それと同様の関係を，キャンベルはロマン主義と近代消費主義の関係に見いだそうとするのである。このようなキャンベルの視点は，「消費社会の思想史」の可能性を考える上できわめて示唆的であると思われる。

二，近代消費主義の本質をどう捉えるか。

さてキャンベルは，近代消費主義の本質，その歴史的特殊性に関して，第４章において彼独自の見解を提出している。この点は非常に重要であるので，以下少し詳しくキャンベルの論旨をたどってみる。

キャンベルは，近代における消費行動の本質は「快楽」を求めることにあるという，一見自明の事柄にたちもどる。近代消費主義は「近代的快楽主義」なのであって，その歴史的特殊性を規定しなければならない。このためには，「快楽」とは何かという問題から改めて考え直す必要があるのである。

キャンベルは，「要求（need)」と「満足（satisfaction)」に関わる行動と，「欲望（desire)」と「快楽（pleasure)」に関わる行動とを厳密に区別することから始める。前者は，空腹から食物を探す行動のように，「存在のある状態」の「撹乱」から生じるものであり，その「満足」とは最初の「平衡状態」が回復されることであって，内部の「撹乱状態」からいわば「押しやられて」生じる行動である。それに対して「快楽」とは，存在のある状態でも，感覚のあるタイプを指すものではなく，感覚のあるパターンに対しての我々

の反応を示すものであるとされる。「欲望」とはそのパターンを経験しようとする性向であって，典型的には刺激によって「外側から引き付けられる」ある過程を指すことになる。

例えば食べ物の場合，空腹状態を和らげたり，栄養を与えるという機能に関心を持つ場合は前者であり，味や香りに関心を持つ場合は後者である。極端な場合，点滴によって前者の目的は達成されるが，その時後者の目的は達成されない。反対に，ただ香りをかいだだけで「快楽」が与えられる場合もある。また，「満足」の状態にあるためにはそれに対する意識は必ずしも必要ない（空腹でないことを意識している必要はない）のに対して，「快楽」を経験するかどうかは意識の問題である。従って，現実だけが「満足」を与えることができるのに対して，幻覚や錯覚も「快楽」を与えることができるのである。

「満足」にむけられた「安楽追求（comfort-seeking)」においては，その対象は比較的限定されており，それが満足されるかどうかは，まわりの環境に依存している。それに対して，「快楽追求」においては対象は必ずしも初めから限定されてはいない。むしろ「快楽追求」の限界は，環境にではなく，それを我々が快と感じるかどうかを決める我々の「趣味（taste)」にあるのである。また，「快楽」と「苦痛（pain)」を対立させるベンサム的功利主義の基本前提とは異なって，「苦痛」は必ずしも「快楽」の反対概念ではないことが注意される。「苦痛」による「刺激」は「快楽」をもたらしうる。むしろ，「苦痛」は「安楽」の反対概念なのであり，「快楽」の反対概念は「退屈（boredom)」なのである。

以上のように，「満足」との対照において「快楽」を定義したのち，彼は「伝統的快楽主義」と「近代的快楽主義」の違いを次のように導き出す。

このような「満足」と「快楽」の違いは，欠乏に脅かされている場合には明らかにならない。なぜなら，通常の状態においては「満足」には「快楽」が伴っており，「満足」を求めることで「快楽」も得られるからである。しかし，この欠乏から免れた特権的エリート層が生じると共に，「快楽」が「満足」とは異なることが明らかとなり，「快楽」が稀少財として求められるよ

うになる。

その際の初歩的な戦略は，「要求」→「満足」のサイクルを人為的に再創造し，「満足」に伴う「快楽」を得ようとすることであり，その極端な例としては，古代ローマ人が宴会の席でわざと食べたものを吐き出したといった場合が挙げられる。しかし，さらに可能性の大きな戦略は，「満足」をもたらす手段をいろいろに変えてみることであり，例えば食卓を異国の珍味で満たしたり，ハーレムを形成したりすることである。このような王侯貴族の振舞いが，伝統的「贅沢」を形作る。

しかし，これらの戦略は結局その限界にぶつかる。特に後者の場合，それはおのずと「快楽」をもたらす多様な対象を確保するための支配力の増大を求めて専制的支配へと向かう傾向があるが，それでも減少できない欲求不満の要素は常に残り続ける。なぜなら，これらの「快楽」の実現は，例えば料理人などの他者に依存しているのだが，「快楽」には「満足」と違って，当人にしかわからないという主観的な要素が常にあるため，他者に対する権力を確保したとしても，主人の嗜好が満たされるとは限らない。また，このような専制的支配を通じる「快楽追求」は万人のものとはなりえないということが，「快楽主義」的態度の一般化にとって根本的な難点となる。

これらの限界をもった「伝統的快楽主義」に対して，「近代的快楽主義」の最大の特徴は，「情動（emotion）」を「快楽」の主要な源泉とすることによる「自律性」の達成であるとキャンベルは言う。

「情動」はどのようなものであっても，それがもたらす刺激によって，可能的には「快楽」の源泉となりうる。このことは，恐怖のような「情動」もホラー映画を「趣味」とする人に対しては「快楽」を生みだすことからわかる。しかし問題なのは，その「情動」をコントロールすることである。恐怖をコントロールすることができない人間にとって，ホラー映画は「快楽」の源泉とはなりえない。

ここで「情動」に対するコントロールが多くの諸個人にとって可能となるために必要な文化的条件として，キャンベルは二つの事を重視する。一つは，「情動」を生みだす，文化的意味を持った「シンボル的資源」を各個人が操

作できるようになることである（前近代においては，聖職者がその操作のもっとも重要な部分を特権的に担っていた）。さらに重要なのは，「情動」が個人の「内部」に属する心的現象として「定位」されることである。このことは，近代以前には一般的には成り立っていない。英語史が示すところでは，中世においては，「恐怖（fear）」という言葉は，突然で思いもよらなかった出来事がもつ属性を指したのであり，人間の内側に属する感情を意味したのではなかった。このような場合，「恐怖」は外側から人間に襲いかかってくるものとして考えられているのであって，それをコントロールすることはできないのである。

キャンベルによれば，「情動」が人間の内側に定位されるようになるための最も重要な歴史的条件は，自然の中で働いている「精霊（spirits）」の存在という仮定が崩壊することであり，即ちウェーバーのいう「脱魔術化」の達成である。これによって，外界は非人称的な法則の支配する領域となり，「情動」はその世界には存在しなくなるのである。しかしウェーバーがあまり注意していないことは，外界の「脱魔術化」が，それに平行して，心的内的世界の「魔術化」を必然的に招くことである。人間の内側は逆に「情動」に満たされた領域となる[6]。

プロテスタンティズムは，この二つの過程を促進したことによって，「情動」のコントロールが可能になる決定的な一歩であった。これによって，人間の「情動」を生みだす上で最も強力な力をもった宗教的シンボルを個人が自分で操作することによって，「情動」をコントロールする可能性が生まれたからである。しかしまだそれだけでは，「情動」一般から快楽を生みだす可能性は自覚されない。その可能性が開花するのは，啓蒙主義の進展によって宗教的信仰が衰え，しかし，信仰の作り出した強烈な情動がまだ感じられるときである。そのような状況にあった十八世紀のイングランドにおいては，本来は宗教的性格をもった恐怖を背景にして，墓地詩やゴシック小説という，「スリル」を「快楽」とすることをめざす芸術が誕生した。しかし，このようなことが可能であるためには，「不信仰の自発的な中止（willing suspension of disbelief）」（コールリッジ）の能力を各人が獲得していなければな

らない。信仰を操作し，シンボルにその力を与えたり拒否することによって，各個人は自分の情動的経験の性質と強度を調整できる。この信仰の操作は具体的には「想像力」を巧みに使用することによって達成される。このような能力は現代人には自明なこととされているが，実はつい最近誕生したものにすぎないのである。

キャンベルによれば，このように「想像力」を巧みに使用して自分の「情動」をコントロールしそこから「快楽」を得ようとするのが「近代的快楽主義」の特徴である。それは単に「感覚」の種類や強度をコントロールすることによって「快楽」を得ようとする「伝統的快楽主義」に比べて，「快楽」の最大化という面で大きな長所をもっている。「想像力」の操作は「自律的」に行なうことができるため，「感覚」の操作に頼る場合ほど，環境に依存することが少ない（この依存のために，「伝統的快楽主義」においては，「専制的支配」へと向かう傾向が生まれる）。また，「感覚」が生み出し得るバリエーションに比べて「想像力」のそれの方がはるかに多いため，「快楽」にほとんど無限の可能性が生まれるのである。

キャンベルはこのような意味で，「近代的快楽主義」を「自律的想像的快楽主義（autonomous imaginative hedonism）」と呼び，第5章では，いくつかの小説などを参考にして，近代人の求める「快楽」が「幻想的」な「白昼夢」にも似た性格を持っていることを描き出すのである。このことが，「近代的快楽主義」と「ロマン主義」との関係を強く示唆することになる。

以上のようなキャンベルの「近代的快楽主義」観について，我々はどのように評価すべきであろうか。

まず彼の主張の根幹にある「満足」と「快楽」，「感覚」と「情動」および「想像力」の本質的違いからくる「伝統的快楽主義」と「近代的快楽主義」の根本的差異については，これを基本的には肯定することができよう。感覚の多様性を求める「快楽主義」は確かに現代においても消滅してはいない。それは例えば「食通」の世界である。しかし，感覚の多様化つまりその微細な差異の追求によって「快楽」を追求することがやはり専制的支配へと向か

う傾向のあることは，例えば，漫画『美味しんぼ』[6]において，「食通」の理想とされる海原雄山が専制君主的性格をもつものとして描かれていることをイメージすると理解しやすい。しかしそこから，この態度が一部の人間を越えて一般化しうるものではないこともまた理解できるのである。

また，キャンベルの，「想像力」を巧みに使用したシンボル操作によって発生する「情動」からの「快楽」という把握は，現代の消費社会論の主流となっている，バルトからボードリヤールの流れに代表されるフランス系の記号論的分析の成果とも重なり合う点が多い。「商品」を感覚の対象としてではなく「記号」とみることは，一般に近代人が消費しているのは「イメージ」であるということにつながってくるからである。両者は共に，「功利主義」「機能主義」的な「消費」理解を排するという根本動機において共通している。

しかしキャンベルの理論はこれらの分析を，G・ライルなどにならった日常言語の分析という方法を援用しつつ，基本的には「感覚」「想像力」「情動」という心理学的あるいは認識論的用語によって行っている点で，記号論と区別される。そこでさらにこの両者を比較してみると，キャンベルの場合，「近代消費主義」の歴史的性格をあばくことにかなりの程度まで成功しているということができよう。それは，「情動」という点に注目することによって，ウェーバーの「脱魔術化」論と結合することができたからである。記号論的方法を採用した場合，なぜ近代において特に物が記号として見られるのかを説明することが困難となる。それは通時態を分析する方法をもたず，共時態の分析に集中するソシュール以来の構造主義的記号論の本来的限界であろう（この限界を意識しないと，逆に物の「記号」的性質を歴史貫通的とみなすことになり，近代の特殊性が見えなくなる）。この点でキャンベルの理論は，記号論と比べて思想史的展開を可能にするという大きな利点をもっているのである。

ただし，キャンベルの主張には大きな問題点もある。それは，「想像力」の自律性を主張するあまり，想像は対象の現前がなくても可能であるとして，「快楽」の「白昼夢」的性格を過度に強調している点である。確かに想像は想像される対象の現前を必要とはしないとしても，その想像を可能にする物

質的支えは必要なのであり，そこに「記号」としての「物」が求められる理由があるだろう。例えば，ゴシック小説的空想を発達させるためには，通常は，ゴシック小説の「本」という物質的支えが必要であるといったたぐいのことである。想像力もこの点では物質的制約を受けているのである。仮にもこの点を見逃すならば，「物」があふれる「消費社会」を説明することがそもそも不可能になる。その点では記号論は，記号としての「物」という考え方によって記号の物質性を含意する限り，「物」を求めるという欲望のあり方を強調しているという利点を持っている（ただし，記号論の場合でも，記号の物質性が消去されて「現実の消滅」といった方向に向かうならば，同様のことになるのだが)。さらに，「近代的快楽主義」の「自律性」というキャンベルの主張は，彼の思想史解釈の具体的内容においても問題を引き起こしているように思われる[8]。

注

1）見田宗介『現代社会の理論』(岩波書店，1996年)。本書からの引用には，Mとして頁数を記した。

2）Colin Campbell, *The Romantic Ethic and the Spirit of Modern Consumerism*, Basil Blackwell, 1987.
本書から長文を引用する場合には，Cとして頁数を記した。
なお，『岩波講座　現代社会学21　デザイン・モード・ファッション』(岩波書店，1996年）の，吉見俊哉氏の「消費社会論の系譜と現在」と題するオーヴァービュー論文においては，キャンベルのこの著作は，七十年代までの消費社会論を越えた「消費社会とブルジョア文化をめぐる，近年盛んになりつつある歴史研究の新しい流れ」に属するものとして名前が挙げられている。
キャンベル以外にも，「消費社会の思想史」の模索として我々が注目しなければならない業績がいくつかあるが，これについても，キャンベルとの論の相異という点から，注8）で触れる論文の中でとりあげる予定でいる。

3）Neil McKendrick, John Brewer, J. H. Plumb, *The Birth of a Consumer Society, The Commercialization of Eighteenth-Century England*, Indiana University Press, 1982.

4）吉見俊哉「消費社会論の系譜と現在」(注1に前掲)，228-9頁。

5）見田氏にもその傾向があるが，近代社会をまず功利主義的な生産中心主義と捉

え，どこかの時点（1920年代や1960年代と言われることが多い）で社会全体が消費主義に転向したととらえることは逆に，現在においても生産の場面を貫徹している功利主義的合理性の力を過小評価することに結び付いてくる。見田氏の使う「消費化社会」という用語は，それが生産から消費への変化を意味しているとすればミスリーディングである。「消費化」は「合理化」とならぶ「近代化」の一現象なのである。

6）キャンベルは触れていないが，デカルトの哲学は，機械論的自然観の確立が「情念論」の成立を伴っているという点で典型的である。

7）雁屋哲・作，花咲アキラ・画『美味しんぼ』（小学館）。

8）本稿では，紙幅の制約上，キャンベルの著作の後半をなしている思想史の具体的構想について検討することができなかった。この問題については岩手大学人文社会科学部紀要『アルテス・リベラレス』に掲載予定の拙論で扱うつもりである。